

(8) 映画・演劇

帝国大学での勉強の傍ら、映画や観劇趣味はヴァリエーションを増していった。しかし、日本ファシズムの影は丸山の趣味にも忍び寄りつつあった。

大学に進学する頃から丸山は、新劇運動の拠点だった築地小劇場（画像）に通いはじめ

た。多くの法学部学生は官僚になるための試験勉強

に忙しく、観劇したのは経済学部や文学部の学生が

多かった。先述した読書会のメンバーとはここで知

り合った。1年次の11月には新協劇団の『夜明け

前』（久保栄演出、村山知義脚色、滝沢修主演）を観て感

動し、島崎藤村の原作を徹夜で読み通した。



この築地小劇場は弾圧の舞台でもあった。1936(昭和11)年5月に新協劇団が上演し、東大の各学友会と演劇研究会が後援した『天佑丸』（ハイエルマンズ作、久保栄演出、丸山はこの戯曲を観ている）は、漁師と網元が激しく対立する描写を含んでいたため当局の警戒するところとなり、後日研究会の幹部は取り調べを受け、謹慎処分を受けた。

丸山は戦前の築地小劇場を覆っていた雰囲気や次のように回想している。

あの時代の築地というのは、単なる娯楽ではなくて、一つの運動だったと思います…

…築地は狭いというせいもあって、舞台と観客席の一体感があった。戦後の大劇場で

はちょっと望み得ないでしょうね。あの築地の狭い舞台でやったということで意味が

あったのではないかと思います。（『定本 丸山眞男回顧談』上）

また映画では、『会議は踊る』(E・シャレル監督)や『外人部隊』(J・フェデー監督)など洋画を多く観た。